

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第15回)

イギリスのクリスマス

初めてイギリスで年を越したのは27年前、サッチャー政権時代の最後の頃のことだ。この冬、ベルリンの壁の崩壊やルーマニアのチャウシェスク夫妻の処刑など、ヨーロッパの激動に近くから目を見張ることになった。だが、それに先駆けて目を見張ったものがあった。ロンドンの街のクリスマス・イルミネーションである。その美しさ、煌びやかさだけではない。その早さにだ。

いよいよ冬、ではなく、いよいよ秋も深まってくるかな、と気配を感じる10月初頭、リージェントストリートをはじめ主な街路での飾り付けが始まった。え、もう？と置いていたら、あつという間にキラキラ光り出した。緯度の関係で、日本よりはるかに早く、急激に日照時間が短くなる（夜が長くなる）ので、イルミネーションの効果は絶大だ。とは言え、いくら何でも早すぎるのでは…

その頃、サッチャーが厳しく国民を叱咤していたものの、まだまだ所謂「英国病」の名残で、あまり熱心に働かない風潮が方々で見られた。たとえば、住んでいた通りの角の家が、改築工事をしているな、と思ったら、一年たってこちらが出ていくことになった頃にもまだ工事中だった、といった具合に。どれだけゆっくり作業をしていたのだろう。ところが、クリスマスが近づいてきたある日、シティの建設中の高層ビルの屋上にあるク

レーンの天辺にクリスマスツリーが据えられた時には吃驚した。そんな暇があったら工事を進めればいいのに…

クリスマス当日にはバスも電車も公共交通機関がすべてストップする、ということにも最初は驚いた。飲みに行くにも出かける手段がない。クリスマスはあくまで家で、家族で過ごす、ということのようだ。もっとも、オフィシャルなタクシー「ブラックキャブ」ならぬ、いわゆる白タクに近い「ミニキャブ」は、運転手も経営者も明らかにクリスチャンではなさそうな移民系の人が多いので、この日も休まず営業している。これは助かる。

10年前に、再びクリスマスをイギリスで迎えたときは、思い切って地元の家族がすることを我が家でもしてみた。本物の「樅ノ木」の購入である。大人の身長よりも大きい樅ノ木を一本、街角で購入し、車に積んで帰ってきた。飾り付けをして、ささやかなイルミネーションを点灯してみると、さすがにワクワクする。さて、楽しいクリスマスを過ごしたあとになって気が付いた。どうやって処分するのだろう…ゴミで出すわけにもいかないし…毎日周りの様子を窺っていてわかった。ちゃんと集積所のようなものが街のあちこちに指定されているのだ。なるほど、日本の門松みたいなものか。